



第30号(2018年5月15日発行)

“たずねる旅特集号”

編集・発行

ふるさとから学ぶ会

代表・梅田 090-4922-5933

## ふるさとの確かな足跡とロマンを感じる旅

今回は、上芭露、東芭露、西芭露の“お宝”をたずねます。

“北見ハッカ”栽培の始まりは、上芭露・西一線の地です。上芭露を中心とした湧別の薄荷（ハッカ）の生産は、最盛期には管内生産高の四分の一近くを占めたという。薄荷景気で沸いていた頃の上芭露は、駅通、警察、病院等の公共施設が置かれ、鍛冶屋、呉服屋、旅館、飲食店などが軒を連ねる市街地が形成され、凄い賑わいだったという。

たずねるお宝は、“薄荷がもたらした繁栄”を伝えてくれる「上芭露神社」と“薄荷御殿”といわれる西芭露の「峯田氏宅」、マンモスとの共存が考えられる3万年前のナウマン象臼歯（右上顎第2大臼歯）の「発見の地（近辺）」（東芭露）です。

今回の“旅”は、豊かな暮らしを求めて奮闘した先人の確かな足跡とふるさと・オホーツクの空の下で繰り広げられた太古のロマンを感じる旅になると思います。

## おすすめ人の案内で“町のお宝”を一緒にたずねてみませんか？

### 上芭露神社

明治40年、「尺角の柱に大山神社と記し祀ってできた」上芭露神社には、現在、“大小2基の神明鳥居”や姿・表情が違う“2対の狛犬”等が奉納され、他の神社とは異なる趣（おもむき）があります。上芭露の栄華の証を感じる神社です。

おすすめ案内人

上芭露在住 上田定幸さん

### ナウマン象の臼歯発見の地

東芭露の沢で偶然発見された不思議な形の木片の様なもの、後日、専門家の鑑定で3万年前のナウマン象の臼歯と判明しました。この臼歯の発見にどんな価値があるのか、発見の地の空の下で、町の学芸員・林さんから伺います。

おすすめ案内人

湧別町学芸員 林 勇介さん

### 薄荷御殿（峯田氏宅）

座敷に沿った縁側と広い土間。玄関口には、タイルで模様を施した化粧モルタル。峯田宅は、他の町から訪れる人もいる今では見ることの出来ない貴重な日本の木造家屋です。霜柱から家を守っているのは、富美焼石の土台です。

おすすめ案内人

上芭露在住 井上 剛さん

## 第7回我がまち湧別町のお宝をたずねる旅（共催・湧別町教育委員会）

- 実施日 6月9日（土）（雨天決行。およそ2時間30分程度の旅です。）
- 集合 文化センターさざ波（午前9時受付 9時10分出発）  
文化センターTOM（午前9時5分受付 9時20分出発）  
※どちらか都合のよい場所にお集まりください。
- 参加料 200円（大人のみ。高校生以下の人は無料です。）
- 定員 先着45名（大型バスに乗っての旅です。）
- 申込み 電話で 5-3132（教育委員会社会教育課）まで  
※締切は6月6日（水）（諸準備のため）

## 「薄荷は、一石何鳥にもなって、開拓農家を救った」

薄荷は地下茎で増え、一度植えると毎年春に芽を出し、畑を起こし、種を蒔く手間を必要としない植物です。明治36年頃、大豆や小麦が、一反(a)当たり4円のと看、薄荷は30円、7倍の値段でした。加えて、1haに栽培した薄荷を刈取りし、乾燥させ、水蒸気で蒸留して、水と油に分離すると30~40kgの油（取御油）になり、運びやすい。その上、蒸留後の薄荷の葉や茎を食べる馬は、病気になりにくく、蒸留後は肥料になる。蒸留設備があれば、薄荷は、農家にとって“一石何鳥にもなる”魅力的な作物でした。明治29年、渡部精司が上芭露で始めた薄荷栽培は、生育条件が合っていた管内で急速に広がりました。(U)

(資料 上芭露記念誌「郷土のあゆみ」、井上英夫著「北見の薄荷入門」)